　　　　　　　８章　ＧＥＮDER

男と女にはいろいろな違いが確かにあるように思われ、もっとも基本的な性差が生理学的、身体的、精神的の違いのなんであるにせよ、性差がはっきりと社会的影響力を持っているように思われる。しかし、これらの影響はとても複雑な形で現れる。あなたが駒場キャンパスを見まわしたとき、東大には男に対して女が圧倒的少ないことを疑問に思うことはありますか？もしくは、ノーベル賞受賞者が男に対して女が圧倒的に少ない理由を詳しく考えたことはあるでしょうか？

140年ほど前のヴィクトリア朝のイギリスを生きていた人に男と女のしめる社会的位置の違いについて尋ねれば、ほとんどすべての人はその理由を生まれつきそなわった男と女の先天的違いに求めるだろう。私たちはこの考え方のもっともはっきりした例をダーウィンの「人間の由来」(1871)に見て取れる。

ダーウィンは男の女に対する身体的な力のみならず、精神的な力での「疑いようもない優位性」に気づき、この違いは生まれつきの違いであり、「生存闘争」と「自然選択」による長い長い進化の過程の中でゆっくりと築きあげられたものだと主張した。

私たちは男が女と比べて、大きかったり、強かったり、勇敢だったり、喧嘩っ早かったり、エネルギッシュだったりすることは、原始時代から受け入れられていたことで、そしてその後、主としてほかの男との女性の占有のための争いを通してさらに強化されたものと結論付けてよいだろう。男の知的能力の高さや想像力の豊かさは、もっとも有能な男が自分たちと自分たちの妻や子孫たちを養い守っていくことに成功したことによる、自然選択と受け継がれていった習性があいまった結果だといえるだろう。（20章）

ダーウィンの女と男の違いは生物学的もしくは進化論的に決定されているという理解はヴィクトリア社会に広く受け入れられ、産業革命以降の日常生活の規範的構造を正当化するイデオロギーを支えた。この社会というのは男と女の社会的役割が、男は外で仕事、女は家で家事と育児という風な区分が強くなっていった社会だ。

これに対して、フェミニストという言葉もなかった時代のフェミニストであったミルは「女性の隷従」（1869）において、社会的性は社会的に作られるという全く逆の考えを主張した。

男が女なしの社会で発見されたなら、もしくは女が男のいない社会で発見されたなら、もしくはもし女が男に支配されることのない男と女の社会があったとしたら、生まれつきの男と女の精神的、道徳的違いはもっと肯定的に知られていたことだろう。現在において女の人の生まれつきの特性と呼ばれているものというのは完全に人工的に作られたものであり、いいかえればある方向からの抑圧、不自然な他方からの刺激の結果である。

ここから見てわかる通り、ミルは二つの社会的性差をなにか二つの性の生まれつきの欠かすことのできない決定的特徴の結果というよりは、人工的に作られたものであると主張している。ミルによれば、はっきりとした違いというのは遺伝的生物学的決定というより教育や外部的な出来事の結果であるとしています。要するに、ミルはその違いを生まれより育ちと関連付けたということだ。

20世紀のフェミニズムにははっきりとダーウィンの生物学的、進化論的決定説を否定し、ミルの社会構築主義を推す傾向がある。たとえば、イギリスのフェミニストの作家のバージニアウルフは彼女の解釈者としての地位を『自分だけの部屋』（１９２９）で「女性はアテネの奴隷の息子より知的自由を与えられなかった。だから、女性はほんのわずかな詩を書く見込みさえも与えられなかった。それが私が自分の部屋とお金に対して強いストレスを強いられた理由だ。」とのべて明らかにしている。フランスのフェミニストの思想家であるボーヴォワールはこの彼女の批評家としての文章にならって、『第二の性』（１９４９）で書いている。「女は女として生まれるのではなく、女になるのだ」と

構築主義が私たちの性差への理解を発展させてくれると言えるにしても、それらの違いに関するすべての疑問に関して解答できるとはいえない。Psychological review に掲載された論文から抽出されたもので作られた3つの文章で作られた今回のセッションの文章は、これらの違い、またその起源やその性質も、今日において私たちのもっともホットな議題であると主張している。

最初の文章は論文の導入部分からの抜粋です。ここでは著者が彼らの研究の背景の概略について説明し彼らの研究を実行に移したカギとなる疑問について明らかにしている。

Fight-or-flight responseは人のストレスによる原始的な反応であると一般にみなされている。初め、1932年にワーターカノンによって述べられ、生理学的にはFight-or-flight response　は生理学的には交感神経系の副腎髄質刺激による、ホルモンカスケードを生成する働きに特徴づけられる。この生理学的現象にくわえてFight-or-flight は人間のストレスに対する対応行動の隠喩であるとされ、人間（もしくは動物の）の交感神経の興奮に反応して逃げるか戦うかはストレス因子に起因するとおもわれている。生命体が脅威の対象や肉食動物を見極めて、その生命体が現実的に肉食動物に打ち勝つ可能性があった場合、攻撃する可能性が高い。敵がもっと手ごわいと判断されるような状況の場合きっと逃走が適切だろう。

調整されつつ行われるストレスへの生物学的な反応は肉食動物からの攻撃、同じ種族のほかのメンバーからの襲撃、火事、地震、竜巻、洪水など恐ろしい出来ごとによる恐ろしい状況などすべての恐怖に対する反応の核となると信じられている。つまり、適切かつ調整されたストレスへの反応は生存の核になるともいえる。自然選択の原則を通して、ストレスに対する反応がうまい生物個体はのちの世代にその反応を受けつぐだろう。それにより、Fight-or-flight responseは進化の結果生じた反応であると考えられる。

Fight-or-flight responseであまり知られていないことだがそのパラメーターを調査する実験は男、特にオスのネズミに対して行われた。最近まで性別における研究の分布の偏りもそうだった。どうして、ストレスの研究は男のデータばかりに重きを置くのか？この偏見にたいするいいわけは最近まで女性の医学的薬の実験や、慢性的病気の治療法の研究や、病気に対する免疫の弱さの研究の理論的根拠と似ている。理論的根拠とは女の人は交感神経反応のサイクルは（生理の関係で）ものすごくたくさん種類がありすぎて、その実験のデータが混とんとした、そしてたいてい解釈不可能な結果になってしまうからだ。Fight-or-flight responseもきっと女性特有のサイクルの影響を受けるだろう。そして、結果として女性のFight-or-flight responseのことを考察する根拠は一貫性のないものになってしまう。しかし、相反する複数の可能性のため解釈が難しい女性の性質のデータがただ単に交感神経系の反応の種類の多さによるだけでなく、女性のストレスへの反応がもっぱらFight-or-flight というわけではなく、その反応においてFight-or-flight という風な反応が有力な候補でさえないからだとしたらどうだろうか？

この論文の最後の章で、著者は彼らの主張を要約し、彼らの研究の限界を認めたうえで、彼らの結論とのかかわりについて議論している。2番目の引用はこの章のはじめからである。

私たちは初めにうまいストレスへの反応は自然選択の原則を通して後続の世代に受け継がれていくと提案した。うまい脅威への対応を持たないものは生殖が可能な年齢まで生き残れる可能性が極端に低い。追加の推定は主として女性は若い子孫たちを育てることに重要な役割を担うので、後世に首尾よく受け継がれていく脅威への反応というのは自分と同じように子孫も守れるものだろう。種の中で女性というのは、初めは妊娠時から保育に多くの時間を割き、そして主として子孫を成熟させてやる上で中心的役割を担う。母としての時間を割く量の多さは、女性のストレスへの反応が自分と自分の子孫の健康を危険にさらさないようなもので、かつ彼らが生き残る可能性を上げるものになることにつながる。Tending,すなわち静まり、子孫をケアして、環境に溶け込むことは多種多様な脅威に対応するのに効果的である。対して、女性の一部の戦うという反応は彼女ら自身と彼女らの子孫を危険にさらすことになる、女性の一部の逃げるという行動は妊婦や、成熟していない子孫をケアする必要性から失われていくだろう。そんなこんなで、この二つに代わる（Fight-or-flight ではない）反応が女性のなかで発展していった可能性が高い。

たくさんの脅威的状況において自分と子孫を守ることは難しく、そして複雑な義務だ。そして、効果的社会集団の利用するものはそれをしないものに比べて多くの脅威にうまく対応できる。この仮説は女性が脅威から自分と自分の子孫が、複数いる群れの仲間にまもってもらえる確率を最大にするように、ストレスへの反応において選択的に連携するという予想につながる。それに応じて、私たちは、女性の子孫を世話して社会集団と連携するというストレスへの反応は、ストレスのかかる状況の女性や子孫を援助してくれるものや保護を与えてくれる連合のネットワークを形成するbefriendingの過程により容易になると主張する。私たちはtend-and-befriend pattern（子供を世話して、社会集団と連携する）の根底にある生理学的メカニズムはattachment-caregiving system、すなわちその母親の絆と子供の成長の役割のため主として以前に調査されてきたストレス関係のシステムであると提案する。ある観点からいえば、女性のストレスのかかる状況にtendingの反応は、子孫たちの基本的生物学的調整システムの発達にとても重要だと思われる幼児への愛情のシステムに相当するものとしてあらわれるようだ。おおくの調査は母の幼児への愛着と幼児の感情的、社会的、生物学的発達については調べているが、母親のtendingを引き起こさせる母親のメカニズムに相当するものの研究をしている学問は少ない。私たちはこのバランスを正そうと試みた。加えて、仲間を助ける傾向はきっと attachment-caregiving systemに便乗して、したがって、最低でもtendingを規制する同じ生物行動学的システムに部分的にでも調整されるだろう。この分析から交感神経系がfight-or-flight responseに生理学的基盤を提供するのと同じように神経分泌系のメカニズムがこれらのストレスへの反応を調整するようだ。

未来の研究とのかかわりの議論でこの論文を結論付ける前に、著者は彼らの研究についての彼らの社会的、政治的見解について説明しています。

この問題は性による人間の行動の違いが社会的規範で理解されるべきあるのか、それとも生理学的反応で起こったと理解されるべきなのかの問題としておこる。たとえば、人間の行動にはかなりの柔軟性があることを考えると母の子孫への時間を割く量は父のものより多くあり続けるのか、否かという疑問が生じる者もいるだろう。返答としては現代の男と女の親としての時間の割き方の差はストレスへの反応が進化してきた頃の違いに比べると重要ではないことに言及する。進化論的生物行動学的主張は現代の人間の行動を規定するものでなければ、かといって、現在の人間の行動が柔軟性を持っていることが必ずしもそれに対する反論になるわけでもない。私たちは人間の社会的役割は文化によって相当異なるし、tend-and-befriend patternに似た行動パターンをとることを規範として女性に課しているような社会が存在することもあり得るが社会規範だけでそれを説明できる可能性は低い。社会規範のポジションは私たちが定めた種の相似性について述べることでなければ、基本的な私たちのポジションのための生物学的証拠を説明することでもない。それにもかかわらず、未来の研究は環境の情報の影響を受けやすい私たちの生物学的行動学的モデルの役割を詳しく研究することが重要である。

性による行動の差を生物学的基盤があるものだとする分析はさらに重大な政治的不安を引き起こす。たくさんの女性は、ある程度もっともなことであるが、そのようなモデルは差別や社会的抑圧の手本に使われるかもしれないと感じる。そのような徒労が起こらないように、私たちは私たちの分析は女性を支配する社会的規範について特定の規範を前提にしてはいないとはっきりさせておこう。私たちの分析がこのメカニズムの理由から女性は母親、いい母親、男親よりいい親じゃなければならないといけないと言っているものであると解釈されるべきではない。同様に、この分析が女性というのは当然男より社会的であり、不適切な社会の基本的骨組を形づくり保ってはいけないという責任を負わされる証拠として解釈されるべきでもない。

しかし、ほかの政治的心配としてはきっと生物学的基盤が何を意味しているかを誤った前提に基づいているものだ。生物学的人間行動の分析は時に社会科学者によって柔軟性のなく不可避的に人間の行動のことを述べているとか、人間の行動が均質的であると考える還元主義的な試みと勘違いされる。そのような理解によりいわれのない行動の生物学的基盤に関する心配を構成する。生物学というのは運命のような一つの中心的傾向ではなく、社会的、文化的、認識的、感情的認識に影響し、影響しあい実質的な人間の行動の柔軟性の結果になる一つの中心的傾向であるのだ。ここ十年の生物学的研究は、遺伝子の発現からストレスの多い状況への急性反応までの幅広い研究でも、生物学が行動に影響を与えるのとちょうど同じように行動が生物学に影響を与えることを示している。社会規範や生物学を人間の行動の説明と見るよりもっと生産的で理論的で裏打ちされた戦略としてはどのように生物学や社会規範複雑にからみついて人間の行動の柔軟性の説明になるかに気付くことだろう。